

3

薬の使い方

薬を飲ませることに苦労しているご家族は多いと思います。少しでも上手に飲ませるためには、薬の種類や年齢など、状況にあった工夫をする必要があります。かかりつけの小児科医や薬剤師に相談しながら、お子さんと一緒にがんばってみましょう。

乳児の場合、粉薬は少量の湯冷ましで練って、上あごや頬の内側に塗り付け、その後、授乳をしたり、湯冷ましを与えたりします。また、湯冷ましに混ぜて飲ませる場合には、飲みきれる量にし、スポイトやスプーン、哺乳瓶の乳首で与えます。水剤はスポイトやスプーン、哺乳瓶の乳首で与えます。甘味や味の濃いものが多いので、嫌がる場合には湯冷ましで薄めてもいいでしょう。スポイトを用いる場合には、頬の内側に沿って少量ずつ垂らすようにしましょう。ミルク嫌いになったり、飲み残しにより薬の効き目が悪くなったりすることがありますので、ミルクには混ぜないようにしましょう。また誤嚥^{ごえん}を防ぐため、上体を起こして与えるようにしましょう。

幼児の場合、水剤はそのまま与え、粉薬は水で飲ませるのが原則ですが、どうしても飲めない場合には何かに混ぜて飲

ませてもかまいません。ただし、薬によって、合うもの合わないものが異なります。さらには、効き目が低下してしまう組み合わせもあるため、あらかじめ小児科医や薬剤師に相談するとよいでしょう。混ぜる場合には飲み切れる量にし、すぐに飲ませてください。また年齢によっては、薬のことや必要性をきちんと説明してあげると、飲めるようになる場合もあります。

飲ませる時間は、特別な指示がある場合を除いて、必ずしも食後でなくてもかまいません。食後は満腹で薬を飲まなかったり、食べたものを一緒に吐いてしまうこともあります。特に乳児は、授乳前または授乳の最初に飲ませるほうがよいでしょう。また、飲ませ忘れた場合に、2回分を一度に飲ませるのは大変危険なのでやめましょう。そのほか、薬を吐いてしまった場合など、判断が難しい場合には、小児科医や薬剤師に相談しましょう。

坐薬の使用についても注意が必要です。用量調節のために、1回2/3個などの指示が出る場合があります。その際は、ベタベタになったり、ボロボロにならないように、必ず包装容器の上からハサミやカッター、包丁で切りましょう。また解熱鎮痛剤、吐き気止め、けいれん止めなど、2種以上の坐薬を併用する場合は、30分以上あけて使用しましょう。薬の性質によっては、使用する順序により効果が遅くなったり

低下する場合がありますので、事前に小児科医や薬剤師に確認しておきましょう。なお、緊急性のある坐薬を優先して使用することが原則です。

飲みやすい薬も多くあり、勝手に大量に飲んでしまう事故が発生することがあります。

薬は絶対に子どもの手の届かないところに保管しましょう。



一口メモ

おむつかぶれ

赤ちゃんの皮膚は薄く、すぐに炎症を起こします。

おむつかぶれは、尿や便が皮膚に付いている状態や、おしりふきの摩擦による刺激などで起こります。

最初はおしりが赤くなる程度ですが、ひどくなると発疹ができたり、皮膚が剥がれてしまったりします。またカンジダ菌というカビの一種が感染することもあります。

尿や便の成分が刺激になり、痛みのため、激しく泣くこともあります。

予防・治療は、おむつをこまめに替えること、おしりを乾燥させること、できれば、拭くより洗ってあげることなどです。

改善がなければかかりつけの先生に相談しましょう。